

第41回「東書教育賞」の 審査を終えて

審査委員長 市川 伸一



2025年度、東書教育賞は第41回を迎えました。例年通りに多くの応募をいただき、審査委員一同、たいへんうれしく思っております。

東書教育賞は、「未来を担う子どもと共に歩む確かな教育実践」という大きなテーマを掲げております。今年は、来年度中に学習指導要領の改訂が予定されており、まさに未来を見据えた新たな教育課程が中央教育審議会でも議論されているときです。

応募された論文を拝見しますと、現在の教育課題に根差した幅広い領域の実践が寄せられていることを感じました。

いくつかの例を挙げさせていただきますと、最優秀賞を受賞された、滋賀県草津市教育委員会事務局学校教育課の山本寛之先生の論文は、タイトルが、「地域と世界をつなぐ探究学習 (ESD) デザインの構築と実践研究」というものです。市内の松原中学校で、絶滅危惧種や地域環境の保全の問題について3年間にわたる系統的な学習に取り組みました。さらに、インドネシアの中学校との異文化間交流を通して、それぞれの生徒が様々な力を獲得できたことが示されています。今後のグローバル社会において、スケールの大きな教育実践として、最優秀賞に選ばれました。

中学校の部の優秀賞は、大阪市立心和中学

校の盛岡栄市先生の「不登校課題に対する『学びの多様化学校』としての役割」という論文です。本校は令和6年4月に大阪市で開校された、不登校を経験した生徒たちのための特例校です。登校するハードルを低くするための工夫が教育課程、教育内容、施設・設備などにわたって多く盛り込まれています。その成果がしだいに表れているところですが、他校からの視察でも、不登校対策のための参考にされているということです。

中学校の部は、東京学芸大学附属国際中等教育学校の窪田悠先生の「コンテンツとプロセスの可視化による理科の単元展開」という論文が奨励賞を受賞されています。本校は、文部科学省のSSHの指定を受けている学校であると同時に、国際バカロレアの教育プログラムの認定を受けたり、英語で他教科の学習を行うイマージョン教育なども取り入れているという先進的な学校です。しかし、ややもするとそれらの関連が見えにくくなってしまいう問題意識があったそうです。そこで、SWOT分析という方法で、現在の学校がもつ強み、弱み、支援の機会、脅威的な問題などを整理して、カリキュラム・マネジメントの中で、学習の内容とプロセスを可視化していったという実践報告です。

応募された論文は多種多様ではありますが、

現在の課題や今後の教育の方向性をとらえた工夫が盛り込まれています。受賞された方々、おめでとうございます。お読みになった先生方の今後

の実践にもぜひ活かしていただけることを期待する次第です。ありがとうございました。

ICTに関わる 論文の総評

審査委員 赤堀 侃司



ICT部門の審査を担当いたしました赤堀侃司と申します。ICT部門では小学校では1編の論文が受賞され、中学校でも1編の論文が受賞されました。以下それぞれの内容について講評をさせていただきます。

初めに優秀賞を受賞されました先生は、長野県の飯綱中学校の高野健人先生です。論文題名は、「全員が主役! AI×協働で実現する探究学習」です。

この論文は、初めに課題を述べ、課題を解決するためにAIを活用し、そのツールを用いた実践を行い、成果を明らかにして結論を得るという、いわば正統的な研究です。

課題が大変明確で、探究学習において、例えば問いが非常に難しいこと、興味関心を言語化できないこと、全生徒を個別支援することが難しいこと、探究の意欲を継続することが難しいこと、などです。これは私も経験上、研究指導とすべて同じ課題です。

研究の問いができれば、ほぼ一人前です。先生も書かれていましたが、「ピアノの鍵盤は何個

あるか」ではすぐに答えられるし、「音楽について調べたい」では問いになっていません。研究ではリサーチクエスションと呼んで、大変重要視しているのです。

自分の問いを言語化できれば、探究活動はイメージ化できています。言語化には、どんな目的で、どんな方法で、という問題を分析する能力が必要だからです。探究は一人ひとりを支援することが必須です。わからないから探究するのであり、わかっていることであれば探究する必要はないので、教師は教えるのではなく、アドバイザーになります。そのために、教師は多大の労力と時間がかかります。そして数か月以上をかけて結論を得るので、生徒の意欲の継続が難しいのです。

そこで高野先生は、先生の高度な技術力を生かして、AIのチャットボットを開発されました。チャットボットは、文字通り対話のできるロボットです。中学生の探究活動に特化して、どんな質問でも自然言語で答えられるようなロボットを開発されました。それは素晴らしいことでした。生徒たちは、このロボットと対話することを通して探究活動を遂行したことは当然ですが、それ以

上に大きな成果がありました。

第1は、先生との直接質問が2割程度に減ったことです。これは素晴らしいことで、たぶん先生に相談する内容は、探究の方向性を得るためのアドバイスなどだと思います。内容の直接的な質問はチャットボットでした。

第2は、チャットボットを通して、生徒たちが協働的な学びを実現したことです。協働的とは、単に意見を合わせるのではなくて、そこに共感やヒントやアドバイスなどが含まれている場合です。そのアイデアはいいね、というマークが824件あったということは、それだけ共感したということです。コメントが251件あったということは、ヒントやアドバイスが多かったということです。つまりチャットボットを通して、生徒たちはお互いが学びあったのです。それは大きな成果と言えます。

第3は、生徒たちは、数か月間、この探究活動の実践を行い、やり遂げたという充実感です。つまり自己効力感が向上したということです。それは生徒たちが「探究は楽しい」と語る言葉に表れています。自信を持ったのです。自信を持つことは、これから先の人生において、あの時こうして乗り越えたんだと思い出して、心の支えになると思います。

最後は、先生の指導観が変わったということです。ティーチャーからアドバイザーになって、生徒と共に探究していく経験をしたことが素晴らしいと思いました。

受賞おめでとうございます。

次に小学校で奨励賞を受賞されたのは、高知市立義務教育学校土佐山学舎の竹村太希先生で、論文題名は「ICTで『個』の学びを『協働』の学びへ。深まる円の面積の学習」です。

この論文の中で、竹村先生はICTツールの分類をされました。この分類が大変よく整理されていて、私自身が勉強になりました。先生は多くのICTアプリに精通されていると思いましたが、中でも図形作成ツールのGeoGebraと協働学習ツールとしてのFigmaとGoogleスプレッドシートを活用

して、円の学習の単元を効果的に指導されました。

例えばGeoGebraを使って、円から長方形に変形して、円の面積を視覚的に計算しやすくしたことで、子供たちが「大変わかりやすい」と感想を述べていました。この視覚化はよく見受けられるのですが、実際に子供自身が操作することで、その実感性が高まったのだと思いました。それは大変効果的だと思います。

またFigmaツールを使って、子供たちは他者参照をしていました。他の子供たちの回答の仕方を参照して、どうしてこのように考えたのだろうか、回答から逆にその考え方へと思考を変えていました。先生はこれを逆思考と名付けられていましたが、私も大変興味深く思いました。

さらに先生自身が、教師の役割が、教える立場から子供たち同士をつなげる役割へと変わったと、述べていることも、私も大変共感しました。

受賞おめでとうございます。

以上が私の講評ですが、審査を終えて感じたことを2点だけ申し上げます。

1点は、論文の訴える力ということです。論文としては申し分のない内容であり、また形式も整っているのですが、何か審査員の胸に入っていないことがあります。表現は難しいのですが、執筆者自身の訴えたい強さではないかと思いません。今流行りの言葉で言えば、非認知と言ってもよいかもしれません。

自分はこんな考え方で、こんな思いで、こんな子供たちを育てたい、という願いがあって、こんな研究をしたという実践は、私たち読み手に届くはずですが、それは行間から感じるようなメッセージなのですが、教育論文では特に大切ではないかと思えます。

2点目は、生成AIとの関わりです。生成AIに問いかけ、得られた答えをそのまま自分のレポートとして提出すれば、それは盗作になります。しかしそれをヒントにして内容を改善したり参照したりすれば、優れた作品になります。つまり盗作と

参照することは紙一重の違いなのです。これから生成AIの活用が求められると思いますが、その諸刃の剣をよく吟味していただきたいと思います。

ICT部門では2編の論文が受賞されましたが、以上の2点はすべてクリアされており、素晴らしいと評価しました。

受賞おめでとうございます。

審査委員

鹿毛 雅治



受賞された先生方、誠におめでとうございます。審査を担当させていただきました鹿毛雅治と申します。

「研究者としての教師 (Teacher as Researcher)」という言葉があります。教師として日々の実践について探究するプロセスの中に研究活動が埋め込まれており、そのような教師の仕事の在り方こそが、高度な専門性を支えているという考え方で、教師はまずもって「研究的実践者」であるべきなのだと言えるでしょう。

東書教育賞に応募されてきた先生方は、まさにそのような「研究的実践者」であり、その地道な取り組みは、日本の学校教育の土台を支え、子どもたちの学びや成長を確かなものにしてきました。日本にはこのような教師文化があり、私は常々、それを誇らしく感じています。今回受賞された先生方は、その代表としてふさわしい方々で

あると拝察しております。

私からは、3つの入賞論文についてコメントを申し述べたいと存じます。

まず、小学校部門で優秀賞を受賞された市川市立平田小学校教諭・蓑部さやか先生の論文についてです。教師には「支援をしなければならない」「やるべきことをやらせねばならない」という心性があり、そのようなモチベーションによって指導がうまくいくこともあるでしょう。しかし、それが固定観念となることで支援が過剰になり、結果として教師自身が疲弊してしまうという実態も見受けられます。本論文は、このような問題意識に立ち、特別支援教育において「アタッチメントを基盤とした見守り型支援」を実践し、そのプロセスと成果を「見取り」によるデータを通して丁寧に描いています。「信じて待つ支援」の重要性をあらためて提言する、意義深い論文であると言えます。

次に、中学校部門で優秀賞を受賞された大阪市立心和中学校校長・盛岡栄市先生の論文についてです。不登校を経験した生徒たちの新たな学びの場として大阪市に開校した特例校における一連の実践をまとめた報告であり、「生徒ファースト」という理念のもと、教育の在り方や施設・設備といった教育環境を抜本的に見直しながら、生徒たちの成長を温かい眼差しで支える学校の様子が生き生きと伝わってきました。一人ひとりの多様性の尊重がますます求められている今日、校長としてこのような先進的な学校経営に尽力されている様子と、そのポジティブな効果がよく示された、意義ある論文であると感じました。

最後に、中学校部門で奨励賞を受賞された石巻市立桃生中学校教諭・志賀優香先生の論文についてです。AIやICT技術の飛躍的な進展によって、学校における英語教育の在り方が抜本的に問われている今日、「相手意識」や「目的意識」をもって、リアリティのある場面で伝え合う学習活動を組織することを通して、英語を通じて人とつながり、思いを伝え合う喜びを感じながら、生徒が挑戦や成長を実感できることを目指した、価

値ある実践論文です。特に、身近で具体的な題材を通した体験学習と表裏一体となって、交流や発信といったダイナミックな英語の学びが展開されている点が印象的でした。

以上の3名の先生方をはじめ、東書教育賞を受賞された皆様のますますのご活躍を祈念するとともに、全国各地の「研究的実践者」の先生方による創意に満ちた実践が、今後さらに活発に展開していくことを心から願っております。

審査委員

高山 実佐



この度、受賞された先生方、誠におめでとうございます。日々の教育活動の中でこのような創意工夫に溢れたご実践を重ね、論文としておまとめになったことに心より敬意を表したいと思います。審査員を務めました高山実佐と申します。私より、山本先生、佐伯先生、蓑部先生の論文につきまして講評と所感を述べさせていただきます。

まず、中学校最優秀賞・山本寛之先生「地域と世界をつなぐ探究学習（ESD）デザインの構築と実践研究」につきましてです。探究学習として3年間にわたり系統的な学習を展開している点、また、身近な琵琶湖という地域資源と国際交流を組み合わせた学習である点において、独創性と高い実行力が際立つ実践でした。特に、インドネシアの中学生との交流を柱に、総合的な学

習の時間と英語科との教科横断的なカリキュラムとして構想・実施している学習は、大変意義深いものだと思います。また、「自分事」として捉えるために、4コマ漫画制作や琵琶湖の写真撮影、それを生かした応援モニュメントの制作などが工夫されており、本実践の特長として探究的な学びを確かなものにしていきます。

先生の高い意欲と行動力が、この取り組みをここまで充実させており、広く世に紹介する価値のある論文であると評価いたしました。

次に、中学校優秀賞・佐伯康輔先生の「目的意識を起点に、『生かす』視点から活動を創り出す生徒」につきましてですが、本実践は、生徒の問題意識から活動をスタートさせ、参加生徒の総意を生かした自発的な取り組みへと発展させている点が大変印象的でした。

MSJ（岐阜県・規範意識啓発推進委員会「マナーズ・スピリット・ジュニア」）の活動の中で、「先生と語り合う会」や高校生との対話を通して考える場を設け、生徒の意識や気づき、思いつきのように口にしたことばやアイデアを丁寧に受け止め、生徒たち自身に方向性を見出させています。主体的な学びの好事例として高く評価できました。清掃や挨拶、歓迎コンサート、学習会、感謝の会、さらに、MSJ通信を通しての活動の発信など、校内のみならず近くの小学校、そして地域を対象にした活動がその生き生きとした表情とともに伝わってくるようでした。生徒たちにとってこれからの社会を生きていく中での確かな経験になると考えられました。

最後に、小学校優秀賞・蓑部さやか先生「持続可能な特別支援教育～子どもを信じて見守る支援～」につきましてです。「信じて見守る」という一貫した姿勢のもとアタッチメント理論をふまえ、安心できる環境を整え、情緒の安定という基盤の上で成長を促した、きわめて意義深い取り組みでした。

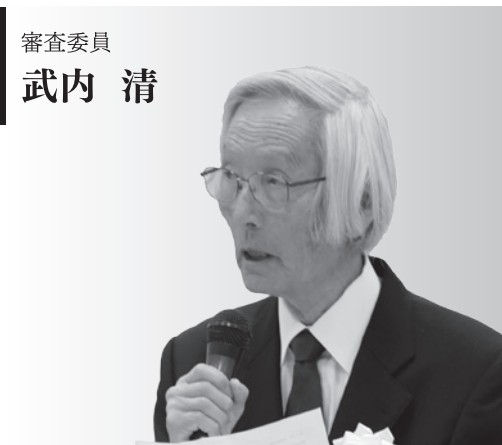
日々のできごとが詳細に記述され、その一つ

一つから、子どもと向き合う先生のまなざしや誠実さが感じられました。行動や表情を丁寧を受け止めながら見守る姿が伝わってきます。データとしても示されていることで、成長が具体的に理解できました。また、強度行動に対する分析には、特別支援教育における確かな専門性がうかがわれ、行動の背景や意味をしっかりと読み取ろうとする姿勢に貫かれています。一人の子どもに寄り添った実践ですが、同様の課題に向き合う児童生徒への支援を考える上でも多くの示唆を与える、汎用性の高い優れた実践記録であると評価いたしました。

今回の審査を通しまして、児童生徒一人ひとりを見つめ、その姿や興味・関心を何より大切に、学びを展開している点に改めまして感銘を受けております。かけがえのない子どもたちの未来をつくるご実践のますますの充実を祈念し、また、こうした取り組みから互いに学び合える機会をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

審査委員

武内 清



審査委員の武内です。私の専門は教育社会学で、教育の現象を、教育の理想から考えるより、教育現実から考えるという見方をします。また、実証的なデータで、教育実践のあり方を考察します。

私も感心し、今回受賞された3人の先生方の教育実践に関して、コメントさせていただきます。

1つ目は、小学校の優秀賞を受賞された市川市立平田小学校の藁部さやか先生の「持続可能な特別支援教育～子どもを信じて見守る支援～」です。パニック障害を頻発するひとりの障害児に対して、教師が安心できる存在となり、積極的な介入を控える支援が、その児童の行動を改善していく様子を詳細に記述したものです。理論を背景に子どもの行動をよく観察した上での支援で、主観を排した客観性が十分感じられます。1つのケースの実践ですが、同様の他の学校や児童にも参考になる汎用性のある優れた実践記録だと思います。

2つ目は、小学校の奨励賞を受賞したつくば市立島名小学校の宮本豪先生の「自己調整し、協働で学びを深める『学びを生み出す授業デザイン』」です。児童が自ら学びを調整し、他者と協働して学びを深める授業デザインを工夫して実践し、児童の学びの成果をルーブリックで検証させたもので、現代のICTの様々なツールも使いながら実践した優れたもので、社会科以外の教科でも使用できる方法です。

3つ目は、中学校の奨励賞を受賞した東京学芸大学附属国際中等教育学校の窪田悠先生の「コンテンツとプロセスの可視化による理科の単元展開」です。空港の検査官が正体不明の物質を科学的に分析・発見する方法を、生徒に考えさせ、実験で確かめさせ、生徒達が理科に興味をいづく様子が報告されています。授業の全体像や目標を生徒に示す方法が有効なことも示されています。大学付属中学校の理科の授業の実践ですが、工夫すれば、一般の中学でも可能な方法です。

この3つの実践で共通しているのは、教育のあり方を理論的にも深く考え、実践的にさまざまな工夫をしてその効果をデータで検証しているもので、他の学校でもモデルにできるものです。

受賞に心からお祝いを申し上げます。

審査委員

種村 明頼



受賞された先生方、誠におめでとうございます。審査員の種村明頼です。昨年、中央教育審議会・教育改訂企画特別部会より、次期改訂の柱として基本となる3つの方向性が示されました。①主体的・対話的で深い学びの実装②多様性の包摂③実現可能性の確保であります。現学習指導要領に基づいた教育課程編成・実施も折り返しを迎え、次代の教育を見据えた取組が大切になってきています。そうした点も含め、今回の研究論文を拝見させていただきました。

はじめに、提出された論文全体についての講評をさせていただきます。論文の切り口が、現在の学習指導要領で重要視している「育成を目指す資質・能力」、「カリキュラム・マネジメント」、「学習評価」、「言語活動」などの充実及び創意・工夫という視点からまとめられたもの。「特別支援教育」、「ICT教育」、「地域との協働」などの現代の教育課題と向き合いまとめられたもの。先行研究を基盤とし、教科の授業デザインに工夫を凝らしたもの。多様な視点からの意欲的な実践が揃っていました。いずれも、どの学校でも直面する課題に対して有効な解決策を示しており、全国の小・中学校で教育活動の質の向上に資する内容であると感じました。

続いて、3点の論文について、講評を申し上げます。1つ目は、優秀賞の岐阜県の本巣市立真正中学校、佐伯康輔先生の「目的意識を起点に、「生かす」視点から活動を創り出す生徒」の論

文についてです。ボランティア精神を育むための「企画づくり」、「あいさつ運動」、「校内美化活動」などの取組を丁寧に記述され、どの学校でも実現可能な形でまとめられていました。特に、教師から取組を一方的に与えるのではなく、教師や卒業生がファシリテーターとなって、生徒の目的意識から活動を引き出している点が印象的でした。生徒の主体性が自然と発揮される仕組みが構築されており、成果と課題の分析も明快でした。

2つ目は、奨励賞の茨城県のつくば市立島名小学校、宮本豪先生の「自己調整し、協働で学びを深める『学びを生み出す授業デザイン』」の論文についてです。「自己調整学習の循環的段階モデル」と「協働学習の5要素」という2つの視点を踏まえ、小学校第5学年社会科における「段階的なルーブリック設定」や「学習のルーティン化」など学び支える環境を丁寧に構築されていました。初期・中期・後期の段階ごとに実践を行い、児童が自ら学習を調整し、協働して学びを深める姿を具体的に示した論文であり、理念の具現化で成功した意義深い論文になっていました。

3つ目は、奨励賞の宮城県の石巻市立桃生中学校、志賀優香先生の「相手・目的意識のある言語活動で挑戦と成長を実感する英語学習」の論文についてです。言語活動は思考を深め、コミュニケーション能力を高めるうえで教育活動の中核を担うものです。今後、小・中学校の先生方にもより一層の重要性が共有されていくことを期待しているところです。本論文では、質の高い言語活動の導入に向けて、「パフォーマンステスト」が一定の効果をもたらすことを実践により、明らかにされました。他教科にも応用可能な視点であり、今後さらに発展する可能性を感じました。

以上簡単ですが、私からの講評とさせていただきます。本日の受賞が、先生方のさらなる研究・実践の励みとなることを心より願っております。

審査委員

東原 義訓



私からは、ICTに関する論文について触れさせていただきます。今回の応募の特徴はAIに関するものが増大していることです。なんらかの形でAIを活用した実践に関する論文がICT関係の5分の1を占めました。明記されていませんから実数はわかりませんが、論文作成過程でAIの助けを借りたものを含めると、半数を超えるのか、どれほどになるのか、興味深いものがあります。

さて、小中学校を通してICT関係で最も評価が高かった論文はAI関係のものでした。AIを活用したから評価が高くなった訳ではありません。実践が総合的に優れたものであったからです。その論文は、中学校部門で優秀賞に輝かれた高野健人様の実践研究でした。高野様、おめでとうございます。個人的なことですが、長野県の先生にお祝いをお伝えできること、同じ長野県人として大変嬉しく思います。

この実践は、探究学習を進める過程において、AIとICTの様々な機能を活用できる環境を整え、その結果、生徒が設定する問いが深まり、生徒同士の協働的な学びから、優れた探究が生まれた、お手本となる素晴らしい実践でした。

この研究では、探究の時間の意義などの理解は教員によるオリエンテーションが有効であり、問いの深まりはAIとの対話が効果的で、具体的な方法や不安解消の相談はまず友達に、そして行き詰ったら先生と相談するという、探究の進め方の知見が得られました。また、学習プラット

フォームは、他者評価を求める姿勢と、それに対して建設的にコメントする文化を醸成し、学年を超えた協働学習を促し、自己肯定感を高めることに効果的であり、さらには、教師の役割は、探究の質を高める生徒との個別の対話であることをも明確にしました。

AI関係以外の実践で優れたものが、もちろんありました。

小学校部門、奨励賞の竹村太希様の実践では、円の面積の学習を対象として、ICTの活用を分類し、実際にそれを実践し、従来の指導方法と比較して、ICT活用の意義をわかりやすく示されたところが評価されました。多くの小学校の先生の参考にしていただきたいICT活用の分類が示されたと言えます。

最後にお伝えしたいことは、実践の場で、研究を進める過程で、そして、論文作成段階で、さらには、私たちが担当している評価のプロセスでも、AIの活用が、今後、大きく広がっていくことが予測されます。AIのさらなる可能性に期待しつつも、様々なガイドライン等の整備に遅れが生じないようにしたいものだと思っています。

受賞された先生方、おめでとうございます。

審査委員

藤井 齊亮



審査を担当いたしました、藤井齊亮です。はじめに、全体的な印象を申し上げます。今

年の論文数は、昨年と同じ154本でした。ここ10年間の応募数平均は134本ですので、応募数は増加傾向にあります。数が多いだけでなく、どの論文も質的に大変充実しており、先生方の教育に対する意欲と、たゆまぬ積極性を強く感じ取ることができました。

さて、私は次の3つの論文について、講評と感想を述べさせていただきます。

まず、小学校部門で奨励賞を受賞された、つくば市立島名小学校・宮本豪先生の、「自己調整し、協働で学びを深める『学びを生み出す授業デザイン』」についてです。

宮本先生は、第5学年の社会科を対象に、児童が自ら学びを調整し、他者と協働して学びを深める授業デザインを、2024年5月から2025年2月まで、前期・中期・後期と段階的に実践されました。その成果をルーブリックで丁寧に検証された点、そしてICTの様々なツールを駆使しながら、学びの多様な選択環境を整備された点が、高く評価されました。今後も、子どもたちが本来持っている「学ぶ力」を一層活かした授業実践を期待しております。

次は、中学校部門で優秀賞を受賞された、本巢市立真正中学校・佐伯康輔先生の、「目的意識を起点に、『生かす』視点から活動を創り出す生徒」です。

教科・領域等は「特別活動」に位置付けられ、具体的には「規範意識啓発推進委員会 (MSJ: マナー、スピリット、ジュニア)」に属する生徒の発案を生かした、新入生との対面式での歓迎コンサート、地域の方を招いての感謝の会や、介護施設でのふれあい活動など、多岐にわたる実践の報告です。学校におけるMSJのカリキュラム上の位置付けや、MSJに参加していない生徒に対する指導についての補足が必要であるとの意見もありましたが、生徒の問題意識から活動がスタートしている点、そして教師のファシリテートが有効に機能していることが、高く評価されました。

最後は、中学校部門で奨励賞を受賞された、

石巻市立桃生中学校・志賀優香先生の、「相手・目的意識のある言語活動で挑戦と成長を実感する英語学習」です。

ALTや小学生、地域住民など、多様な相手に対して「目的を持って発信する」という志賀先生の試みは、生徒たちが高い意欲を持って「生きた英語」を学ぶ、優れた実践であるとの評価を得ました。一方で、学習者の達成感を重視するあまり、小学校から中学校前半で本来必要な「言語的な基礎固め」がおろそかになっていないかという指摘もありました。この点をさらに追求されることで、本実践の価値は一層明確になるはずです。

以上、全体の印象と、受賞された3つの論文についての所感を述べました。ご紹介した3つの実践は、それぞれの教科・領域において、全国の模範となる素晴らしい研究です。

この度の受賞、誠にありがとうございます。

審査委員

松岡 敬明



この度、東書教育賞の論文審査に当たらせていただきました松岡敬明と申します。どうぞよろしくお願いたします。

まずは、今般受賞された皆様、誠にありがとうございます。心よりお祝い申し上げます。日々の教育活動に尽力されながら実践研究を進め、その成果を論文として結実させられた皆様のご

努力に、心より敬意を表します。

私からは、中学校部門において最優秀賞を受賞された山本寛之先生、優秀賞を受賞された盛岡栄市先生、そして奨励賞を受賞された窪田悠先生の各論文の内容に触れながら、所感を述べさせていただきます。

山本先生は、「地域と世界をつなぐ探究学習（ESD）デザイン構築と実践研究」という論題で研究を進められました。本実践は、地域資源を効果的に生かしながら、インドネシアの中学校との交流を実現した点に大きな特色があり、ESDの理念を具体的な学習活動として着実に形にした取り組みであるといえます。生徒の実態を丁寧に捉え、環境課題を身近な問題として考えさせる学習設計は、非常に実践的であり、学びを通して生徒の意識や態度に確かな変容が見られた点は高く評価されるべきでしょう。学びが単なる知識の獲得にとどまらず、生徒一人一人が自分事として考え、主体的に関わろうとする姿勢が育まれていることがうかがえます。

また、筆者の専門性と熱意に支えられた指導が、学習の質を大きく高めている点も印象的です。日頃から生徒や関係者との対話を重ねながら実践を積み上げてこられた姿が伝わってきます。そして、「指導者が本気で取り組めば、ここまでの実践が可能である」ことを明確に示した点にも大きな価値があります。

一方で、学びを地域での具体的な行動すなわち“Act locally”へとどのように結び付けていくか、また、他の教員・他校でも活用しやすい形への整理が、今後の課題として考えられることでしょう。

本実践が今後のESD推進に向けた好例として広く共有され、多くの学校に示唆を与えることを期待しております。

続いて盛岡先生の研究内容について触れさせていただきます。盛岡先生は、「不登校課題に対する『学びの多様化学校』としての役割」という

論題で研究を進められました。本実践記録は、大阪市が不登校対策の一環として、学籍を移して学校生活を送ることができる新たな学校の在り方を構想し、大阪市立心中学校を開校するに至った経緯と、その後の運営における課題や取り組みをまとめられたものです。筆者が開校準備室長から初代校長として本校の立ち上げに携わり、前例の少ない施策に真正面から向き合ってきた姿勢が、論文全体から強く伝わってきます。生徒の状況に配慮しながら適切な学びの場を構築しようとする筆者の使命感と不断の努力が随所に見られ、本稿は一学校の実践報告にとどまらず、大阪市における不登校対策の新たな方向性を示す試みとして高く評価されるでしょう。教育課程や施設・設備には、特例校ならではの独自性や先進的な工夫も見られますが、不登校への向き合い方や生徒への配慮の在り方には、他の公立学校においても十分参考になる示唆を多く含んでいます。

本施策は、不登校対策に新たな方向性を示す取り組みとして大いに期待される一方、その教育的効果をより客観的に捉えるためには、卒業後の進路や社会的自立に目を向けた中長期的な検証を重ねていくことが今後の課題となるでしょう。

最後に窪田先生の研究について触れさせていただきます。窪田先生は「コンテンツとプロセスの可視化による理科の単元展開」という論題で研究を進められました。本実践は、学習の成果や思考の過程を明確に捉えることの重要性を踏まえ、理科におけるカリキュラムマネジメントの在り方を具体的に示した点で意義深い取り組みであります。SWOT分析を用いて教員間で課題を整理し、共通理解を形成した上で授業改善へつなげていくという一連の流れは、論理的で分かりやすく、実践の再現性を意識した構成となっています。また、いわゆる若手教員と呼ばれる世代の筆者が中心となり、複数の理科教員を参画させながら学校全体の視点で授業改善を進めた点には、高い意欲とリーダーシップが感じられます。

「空港保安検査官と正体不明の液体」というような課題設定の工夫により、生徒が主体的に学習に取り組む姿が見られたことは、本実践の成果と言えましょう。本実践は、理科教育におけるカリキュラムマネジメントの一つの有効なモデルとして、今後の発展が期待されます。今後、生徒の自己評価に加え、外部的・客観的な視点を取り入れた分析を行うことで、教育的効果をより多面的に検証できるものと考えられます。

以上をもちまして、簡単ではありますが私の講評とさせていただきます。